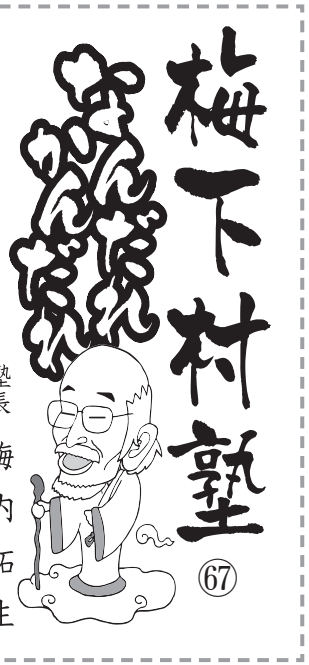
梅下村塾 ㊼



塾長　梅内拓生

「森と水と命の惑星」国際会議

～地域と世界の心と魂を詠む～

東日本大震災から学ぶもの(3)

（菩薩行と祈り）

東京都あきる野市にある「地蔵院」の住職は2011年4月、若手僧侶を中心とするボランティアグループ「スジャータプロジェクト」を立ち上げ、僧侶中間や一般の有志らとともに東日本大震災の被害地支援を続けている。2013年2月1日の西多摩新聞がこの活動を掲載している。

大船渡市盛町生まれの私が、この記事に大きな関心を持ったことはいうまでもない。これは仏教の菩薩行を行っているのだと考えました。お釈迦さまが6年もの苦業の後に菩提樹の下で瞑想をしている時に、一人の娘のさし出した乳粥を頂いて、悟りを開いたとされております。その娘の名前の「スジャータ」からプロジェクトの名前がつけられました。

この釈迦とスジャータの話には、いろいろな深い意味が含まれておりますが、悟りへの修行においても、苦業だけではなく、「中道」や「中庸」のなかでこそ、ものごとの大切な本質的なものに触れることが出来るという教えです。「スジャータ」プロジェクトも被災地の復興に地道に関わっていく考えのようです。

東日本大震災は大きな深い傷跡を残しました。震災の1年前の2010年に「気仙三十三観音霊場巡礼　祈りの道　佐々木克孝」が東海新報社から出版されました。その出版本の最後の部分に「三十三観音霊場巡礼随想詩気仙巡礼短歌と返歌ー歴史の底流を詠むー梅内拓生」が掲載されています。

「スジャータプロジェクト」から、気仙地方には「祈り」の文化が深く根付いていることを思いだしました。「菩薩」と「祈り」のつながりです。鹿踊り、鬼剣舞い、七夕、季節の祭り、これらは「祈り」とつながっていることに気づきました。

2月8日（金）第5面に東日本大震災を詠んだ句が「東海文芸みさご句会　2月句会兼題「早春」「雑詠」に掲載されております。

大津波訓（おしえ）のこして寒の古碑
（及川　冨子）

春浅し復興会議に未来絵図
（田代　光子）

早春の記憶に黒き津波かな
（広野　広）

（日本文化の血脈）

弘法大師空海の教えに「生れ生れ生れ生まれて生の始めに暗く死に死に死に死んで死の終わりに冥し」がある。空海は四国を始めとして山中を歩いて修行し、唐に渡って密教を取得して、密教の体系を築いた。空海の教えは曼荼羅に込められている。

この曼荼羅をどのように捉えるか、その捉え方により宇宙と現世の捉え方が変わって来る。縄文、蝦夷、アイヌと共通の血脈を持っている気仙に見られる忍耐力は東日本大震災での態度と行動から、国内外の人々が既に認めている。この忍耐力を「菩薩行」にどうつなげるかを求めることが大切である。

東北地方には山岳宗教の歴史と伝統がある。奈良仏教の流れをくむ法相宗の徳一和尚が都から会津に移って、東北の山岳宗教の風土で、天台宗の伝教大師最澄との宗教論争をしたことは東北地方の文化の血脈を考える上で重要なことである。それは、草の根の人々の救いを視野にいれた宗教であることなのです。

気仙の地方の草の根からも、菩薩行に通じるものを立ちあげ、国内外と手をつながねばならない。ここに、縄文文化を始めとする、世界の文化の古層の血脈に共通する「魂と心」が生まれて来ると思う。

（立ち上がれ気仙）

盛小学校昭和28年卒業の同級生から、同級会の連絡があった。仕事の都合で出席できないことは残念であるが、同級生たちが、お互いに連絡しあってふるさとの復興への思いを話し合うことを考えると、ふるさとの団結の力が伝わって来て嬉しく思った。

東京で行われたふるさと大使の懇談会のことは既に梅下村塾㊹に掲載したが、ふるさとのいろいろなグループが気仙の復興のために力を合わせている姿には胸が熱いものが湧きあがってくる。遠くに住んでいる、小学校の同級生の短歌を読んで家族愛の深さに感動した。同級生とは短歌を通して、ふるさとを思う気持ちを孫子の世代につなげようと話し合った。

2年前に大船渡市と気仙沼市で開催した「森と水と命の惑星」国際学会の前後は、頻繁に故郷を訪問したが、この活動が国内外に広がってきており、故郷に足を運ぶことが少なくなって来ている。東海新報への記事の掲載を介して、「ふるさと気仙」とつながりを持つことが出来るのはこころ強い。